

第1回「資産の有効活用等に関する検討会」における委員による主な論点

○ 国の資産の売却よりも継続的な収入（吉野座長）

「フランス債券市場のピナトン会長は、フランスの経験でいくと、あるときに売却してしまうと、その年だけの財政（赤字）削減にはなるけれども、それによってかえって財政規律を立てようということがなくなってしまう。ですから、フランスの経験からいけば、毎年収入が入るように運用する方がいいだろう。ただし、そういっても、国がずっと持っていたとしても、オペレーションなど民間ができるところは効率的にする必要がある。しかし、毎年入ってくるようにした方がいいのであって、一時的に売るということはフランスの経験ではよくないのではないかということでした」

○ 地方の事業へのレベニュー債等の活用（吉野座長）

「地方の事業に民間資金を導入して、…収入に応じて債券の金利が変動する。これはレベニュー債ですけれども、こういう形で民間の資金を導入できないかと思っております。…このいい部分は、その債券の金利が毎年わかりますから、…、全部透明化できます。そうすると競争にもなるのではないかと思います。…これとの関連で、…、民間の地方への投資信託とか地域ファンドというものももう一つできるのではないかと思います。…元本保証ではないのですが、銀行とか郵便局の窓口を通じて資金を提供する。これは、地元の方々が、それだったら自分の10万円のボナナスのうちの2万円ぐらいは地元へ貢献してあげようかということにもなりますし、顔が見えることになると思います」

○ 特定目的の会計情報の作成・活用（会田委員）

「企業会計方式を導入し、全体情報としての財務会計情報は充実してきたものの、今後、資産の有効活用に向け、特定目的の会計情報を作成し、意思決定に役立てることが期待される。支出原価だけでなく、機会原価を適用し、コスト負担を把握することも必要」

○ 国債の発行年限の長期化・多様化（島本委員）

「日本の国債は、むしろ発行年限の多様化を進めると同時に、長い債券をもっと出してもいいのではないかというのが持論であります。…長期債を増やす方が、こうしたリファイナンスのリスクを抑えて長い資金が安定的に調達できるというメリットと、…金利が上がった方が投資家層が分散されるというメリットもあると思います。長い金利が上がってくると、例えば生命保険会社とか海外の投資家といったいろいろな投資家層が、より買いやすくなる」

○ 低い調達コスト・長い時間に強いという国の比較優位を活用したState Capitalist（富山委員）

「国は自らの市場プレーヤーとしての民間プレーヤーに対する比較優位、例えば低い調達コストとか時間的なペーシエンス、長い時間に強いという特徴を生かして、国民資産の価値最大化を図るキャピタリストたるべき」

○ 聖域なき資産の有効活用（財投機関・裁判所・国会等の保有資産）（富山委員）

「スコープをどこまで広げられるかというのは非常に重要な問題でありまして、言うなれば聖域なき資産の有効活用ができるかどうかということです。…国が直接持っている資産というのは、ある意味でいろいろな議論がしやすく、随分議論されてきているわけですが、これが財投機関の側に回ってしまうと、先ほどの独立行政法人を含めて、実は近そうで遠い。…財投機関の場合、有効活用余地のある資産が結構たくさんございます。…三権分立の中で裁判所と国会の保有資産をどうするか。…これは聖域なき資産の有効活用ということで突っ込んでいく必要があるだろう」

(以上)